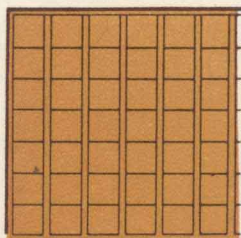


波多野完治著

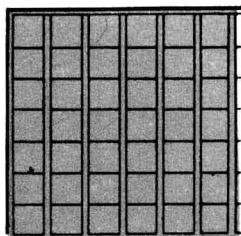
現代文章心理学



大日本図書

波多野完治著

現代文章心理学



大日本図書

現代文章心理学

昭和四十一年四月九日 発行 ©

定価 九〇〇円

著者 波多野完治

発行者 河村敏雄

印刷者 白井倉之助
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所

大日本図書株式会社

東京都中央区銀座一の五
電話東京 八六七一一九
振替口座 東京二一九番

新版の序

本書は昭和二十五年に初版を出した『現代文章心理学』の新版である。この本は半年ほどのあいだに再版をすることができたが、その後重版していないので、古本屋などでは途方もない値段になっている。わたしのところへも、どこかで入手できないかといってくる人があるが、著者が他人にわけてあげられるほど自著のストックをもっているはずがない。残念ながら絶版です、とごへんじするよりない有様であった。こんどの新版で、そういう人びとの好意ある欲求にもこたえることができるようになって幸いである。

ただし、旧著は、A5判で四〇〇ページにあまる大冊なので、値段の関係からどうしても一部割愛せざるをえない。いろいろ考えた末、この本の「現代文章の理論的基礎」をはずし、『文章心理学』のなかの理論的部分（これも「新稿」のなかからはずしてある）とあわせて、あらたに稿をおこすことにした。したがって、本書はもとの本の「研究調査」の個所を改訂したものと承知されたい。『文章心理学』にしろ、『現代文章心理学』にしろ、理論的部分は、自分の研究だけでなく、他の人びとの研究や思索に依存せねばならない。だから、すぐれた研

究が、どこから出現すれば、必然的にかきかえられなくてはならなくなる。言語心理学的研究のすさまじい進歩の時代に、一五年前、二〇年前の旧稿がそのまま通用するわけがないのである。これは「文章心理学の理論」というような題になるはずである。

わたしがこの『現代文章心理学』で試みた研究は、いわゆる「位相語」の特徴である。言語は社会のもの、文章は「個人のもの」と大体はわかれるが、社会のなかにもいくつかのこ とばのながれがあつて、それぞれまとまりをなしている。日本ではこれを菊沢李生氏が位相語と名づけたのだが、近代言語学でもいわゆる「応用言語学」すなわち、外国語学習の問題と関連して、この現象にいやでも応でも注意をはらわざるをえないようになったようである。英語として、「文法的に正しい」というだけでは、英語はつかえない。演説の文章と、電話の文章（これは両方ともはなしことばだが）はおのずからちがうのである。こういう方面に着目していくと、スタイルの問題がいろいろわかつてくる。文学者が、わざと明治初期の文体を模してある小説をかく。この場合の「明治初期」の言語というのは、特定の作家のものではなく、一種の位相語としてのスタイルなのだ。位相語がスタイルとして個人的定着をうけるのである。こういうふうには位相語を想定していくと、作家がなぜある小説にはある文体をとり、ある他の作品には別のスタイルを創設するかのプロセスもわかつてくるかもしれない。

エンクウイスト、スペンサーおよびグリゴリーの三氏が『言語学とスタイル』という小冊

子を出した（一九六四年）が、この人びとの立場の一つは、こういうところにある。これはまた、現在のような言語学上の研究状況とスタイル解明とをむすびつける、いちばん手とりばやい道でもあるのだろう。

わたしが、この種の研究をねっしんにやったのは一九五〇年ごろである。だから、理論的立場はけっして、エンクウイスト、スペンサー、およびグリゴリー三氏のように、はっきりしたものではなくて、いわば、無我夢中で、どうもこれがわからぬと、個人文体の秘密も終局的にとくことはむずかしいようだ、とおもってやったにすぎない。だが、これは応用言語学ないし、実用文章修業の立場からは本道だったようである。その後日本では、この方面の理論的究明はすすんでいないので、今後はその方向への進展が期待される。本書の再刊がそうした動向への機縁となると幸いである。

一九六六年三月

著 者

第一版序文抄 (一九五〇)

『文章心理学』以後、この方面におけるわたしの研究は二つの方向をとった。

第一は「文章」を言語の方向に深化することであった。前著ではスタイルの研究が、いきなり「文章」または「修辭」からはじめられた。しかしいうまでもなく、修辭は「單語」または一般的に言語についての理解なくしては充分でない。前著では、いわば言語そのものの問題をそのままアポリアとしてのこしておいて、それから以後の部分だけをとりあつかっていたのである。これは一つにはわたしの言語觀がはっきりしていなかったからでもあるが、また一つには、あの本をかいているところから、日本では神秘的言語觀が圧倒的に勢力をえていて、合理的、科学的言語觀を主張するのに不適当な雰囲氣であったことが大きな理由をなしている。『現代文章心理学』では、この欠陥をおぎなうのにつとめた。

第二は個々の作家のスタイルをしらべるまえに、その前提として的一般文章の特徴をしらべることであった。個々の作家の主体的特徴は前著のような方法でもいく分明瞭にはなりえたと考えるが、しかし個々の作家の文体をほんとうにつかむためには、ある時代の「標準文

体」とでもいふべきものを取り出し、それとの関係において一人一人の作家の文章を調査していく、という方法がいちばんよいようにおもわれる。そこで、『現代文章心理学』ではこの方向の研究が努力されている。

このために、まず現代日本の文章で代表的なジャンルであるとおもわれる、新聞、雑誌、および小説の三つをえらんで、その各ジャンルの特性を取り出した。

序論は言語理論と文体との関係の理論的究明に、第一編と第二編とは現代文章の各ジャンルの実証的調査にあててある。

このうち、新聞文章の研究は、現代文章のうちでも特に重要なものであり、また戦後の二、三年間、新聞協会の好意で、しばしば考える機会をもったので、特に第二編として別にまとめた。

最後に結論として言語表現の発達という観点からみた、近代日本の文体変遷史をのべた。

なお、前著『文章心理学』をみていない人のためにとおもって、序論として、前著の主要をごくみじかくまとめて巻頭にかかげた。これによって『文章心理学』をみていない人も、このような研究の意味、方法、性格等が、大体理解されるかとおもう。

じつをいえば、調査の資料は、この本もう一冊分くらい集まっているのである。それは主としてプローズ・リズム（散文のリズム）の問題をとりあつたものであるが、もう一息と

いうところで、どうしても解明できない点があつて、まだ、まとまらない。まとも次第、一本として公表したいとおもっている。

わたしのこの種類の研究に対しては、各方面から意外な援助がある。前記新聞協会の人びともそうであるが、その他、初対面の人などから、『文章心理学』のことをきかれて、おもはゆいような、びっくりしたおもいをするものが少なくない。これらの人びとの好意に対しては、わたしはどうかしてこのような研究を成功させたいものだとおもっているが、しかし最近では、研究の困難さが、ひしひしと身にしみてきた。若いころの無鉄砲が、こんな研究に手をつけさせたのだ、といく分後悔にいた感慨をもつこともまれではない。

幸い、日本に比較文学会というのできて、わたしに欠けている知識をおぎなってくれるような組織になつてゐるので、それをたよりに、わたしはもう二つ三つ、しのこした問題を究明することに努力するつもりである。

一九五〇年年頭

著者

目次

新版の序

第一版序文抄（一九五〇）

序論	文章心理学とはなにか	一
----	------------	---

一	文章心理学の四つの課題	三
---	-------------	---

二	文章心理学の原理	九
---	----------	---

第一編	現代文章の諸相	三
-----	---------	---

一	現代ジャーナリストの文章	二五
---	--------------	----

二	現代小説の文章	六
---	---------	---

第二編 新聞文章の心理学……………二五

一 新聞の文体……………二七

二 新聞の記事……………二六

三 新聞の表題……………三四

四 放送ニュース……………二五

結論 近代文体の展開……………二七

一 文章とはなにか……………二九

二 分類の試み……………二六

索引

序 論

文章心理学とはなにか

一 文章心理学の四つの課題

一 文章心理学の四つの課題

文章心理学とはなにかについて、くわしい説明は前著『文章心理学（新稿）』でしてある。ここでは前著をみていない人、みても忘れてしまった人のために、ごく簡潔に、その課題を列挙しておく。

文章心理学はおよそ四つの課題をもっている。

(1) 文章をかく場合の「手法」の心理学的根拠をあきらかにする

作家がものをかく場合、最初の出発点は現実の国語である。彼が生まれた社会でつかわれているコトバの語量、その文法規則、それらのつなぎ方、ならべ方を彼は無視するわけにいかない。しかし、彼はその「目の前の国語」から、自分のもつ題材にもっともあつた表現様式をえらび出す。これが「文章化」または「文章の創作」である。この仕事はどういうメカニズムにしたがつて、どういうプロセスをとっておこなわれるかが、文章心理学の第一の研究しなければならぬことである。これは、たとえば日本語のもっている「表現能力」「表現価値」のこまかい測定となり、その心理学的説明になるだろう。

(2) 個々の文章ジャンルや作家の文章類型の心理的基礎をしらべる

第一の課題は、いわば、文章の一般心理学で、文章ならばどれもがもつべき特質であったり、ある型の文章が当然示すであろう美的価値を、心理学的に解明する仕事である。これに反して、第二課題は、あるジャンルや、ある作家には、そのような手法のうち、どういうものが「特に」はっきりと、またしばしばあらわれるかをしらべ、その心理的説明をする仕事である。だから、第二課題は、「文章の「性格心理学」になる。

文章の性格にはおよそ三つの種類がある。

第一は、文章のジャンルによるちがいである。

新聞記事の文章

手紙の文章

広告の文章

小説の文章

それぞれに特色がある。この特色は、それぞれのコミュニケーション機能によるちがいでできているものだ。そこで文章心理学はコミュニケーションの心理学と協力して、ジャンルの文章的特質をあきらかにする。

第二は個々の作家の文章である。もちろん作家ばかりではない。新聞記者の文章だって一人一人ちがうだろうが、そのちがいは作家の場合ほど大きくはなく、また作家の場合ほど研究して面白いものでもない。であるから第二の小分類は、まず作家の個性、気質、病歴などとの関連において、文章の特徴をしらべることになる。

第三は、集団のもつ文章性格である。大きくいうと、日本人の文章、イギリス人の文章、アメリカ人の文章、みんなちがう。翻訳して、その特性のでてくるものもあれば、きえてしまうものもある。

一 文章心理学の四つの課題

日本人のなかでも、時代によって文章はずいぶんちがう。長い文のよろこばれた時代もある。みじかい文でなければいけないとされる時代もある。対句の多い、かざりたてた文が尊敬されたときもあり、それではいけない、とされた時代もある。『文章軌範』という中国の有名な作文読本があるが、この本は、かざりたてた文を否定して、古文という、率直な表現を支持するためにかかれたものである。

文章は一人一人でかくものなのに、なぜ、集団としての性格がでてくるのか。これもこの分野の研究として、面白い課題になる。ある「国民性心理」の研究者は、国民性というものはあるかどうかわからない。わかっているのは、国民のステレオタイプだけだ、といっている。文章の型もおそらくそういうステレオタイプの一つかもしれない。しかし、そういうステレオタイプを手がかりにして、国民性というような、目にみえぬ特性にいたりえぬでもなからう。

(3) 文章のうつりかわりを心理学的に説明する

文章というものは、「一つ」だけあるのではない。同一のことをあらわすのに、いろいろのやり方があり、これが「手法」という、第一の課題にもなったのだが、またそれは下手から上手へ、悪文から名文へという第三の課題にもなる。

だから、これは「文章の発達心理学」である。子どもの文章からおとなの文章へのうつりかわり、作家が若年から老年にすすむにつれて、どんなふうにな「文章」がかわるものか、などの研究は個人についての文章の発達心理学である。これに反して、言文一致体の提唱にもなつて、はじめはどんな文章があらわれてきたか、それがたとえ